

決定組織と説得抵抗性:

イオニアの支配者たち(II)

渡 辺 浩

A:先生こんにちは、今年も押しつまってきましたが、今日のお話は前回のつづきですね。

Q:そう。ミレトスの支配者ヒステイアイオスが、スキュティア遠征の勲功によって得たミュルキノスで、新都市の建設に熱中していると、サルデイスに駐留しているダレイオスからよび出しを受けた。急ぎ出向いて拝謁すると、「そちの才智と誠心は朕の嘉するところ、そちがミュルキノスにいてからは淋しく感じておったぞ。この際ミレトスとミュルキノスのことは忘れてスサに参り、朕の陪食者として側近に侍し、国事の裁断に万事助言してくれるように、榮華に不足はさせまいぞ」とあって、そのまま大王の還都に随行した。サルデイスにはダレイオスの異母弟アルタブレネスが統督として残された。

ヒステイアイオスは、いまや大帝国の顯官として大王の信任厚く、その富貴と権勢はすべてのギリシャ人を凌いだ。しかし彼の本心は宮仕えよりも、イオニアに帰って自由に行動し、実力で自己の基盤を拡大するにあった。だが機会を見て賜暇を願っても許されず、自分が政策的にイオニアから隔離されているのは明かだった。

こうして10年ばかり経過した。ミレトスの支配権は、ヒステイアイオスの従兄弟で腹心のアリストゴラスの手に委ねられていたが、その下でミレトスはその史上の繁栄の絶頂期に達していた。しかしヒステイアイオスにとってミレトスに帰る機会は、何か彼でなくては処理できないほどの大事件がイオニアで起こる場合以外には、考えられなくなっていた。

このころやはり繁栄期にあったエーゲ海中央のナクソス島で政争が起こり、アリストゴラスはこれに干渉する手がかりをつかんだ。彼はアルタブレネスに頼んで、資金面はわれわれが負担するからと、強力な艦隊を編成、供与してもらった。しかし作戦の実施を前にして彼と艦隊の指揮官メガパテスとの間に仲違いが起こり、作戦計画は洩れて、アリストゴラスの進攻は失敗に終わった。

彼はアルタブレネスから軍事費を請求されて、財政的に窮地に陥ったばかりでなく、メガパテスはダレイオス、アルタブレネスの従兄弟にあたっていたので、この

2人に対してどんな悪口を告げ口されるかわからないことになった。ちょうどこのとき、スサのヒステイアイオスから彼のもとに、ペルシャへの反乱決起の秘密指示がとどいた。

アリストゴラスは腹心の者を集め、反乱の是非について相談した。その中に伝記作者ヘカタイオスがいて、ダレイオスとミレトスの軍事力、経済力を比較列举し、成功の可能性はないと説いたが、他の者は反乱に賛成し、反乱に踏みきった。これは自分の失敗によって追いつめられた者のせっぱつまった決断だった。

アリストゴラスは自ら変身してミレトスの独裁制の廃止と民主制への転換を宣言し、ついでイオニア諸市にも同様の变化を押しつけ、数人の独裁者を追放した。こうして諸市をたちまち味方につけ、反乱に加担させることに成功したが、さらに強力な友邦の援助が不可欠だった。ギリシャ諸市の昔からの盟主スパルタに、彼は自ら乗り込んで説得にかかった。

当時スパルタの王はアレクサンドリデスの子クレオメネスだった。アリストゴラスは銅板に彫り込んだ世界地図を持参して、クレオメネスと会見し、まず第一に、ギリシャ諸市の盟主として、ペルシャへの隷従状態にあるイオニア人を救ってほしい、と名誉心に訴え、ついでペルシャ人の常用する戦術、武器とギリシャ人のそれとを比較して、スパルタ軍の援助があれば彼らを打ち負かすことは容易であると論じ、さらにペルシャに臣属しているいろいろな民族、土地、鉱物資源、農業、牧畜生産の莫大な富を述べ、それらを支配できるこの機会を逃さないように、と決断を迫った。3日後に再見するとクレオメネスは、「イオニアから大王の都スサまで何日行程か」と訊ねた。アリストゴラスは「3カ月かかります」と正直に答えたが、これは不覚だった。クレオメネスは「スパルタ人を海から3カ月もかかるところに連れていこうとはとても無理なこと」と言うので、それ以上の説明は聞こうともせず、席を立ってしまった。取りつく島もなく、こうしてアリストゴラスは、スパルタの説得に失敗した。

スパルタに代りうる強国としては、新興のアテナイシ

かなかった。ここで当時のアテナイの政情を見ると、ペイシストラトスの僭主制がつづいた後、その子ヒッピアスが跡を継いだ。スパルタの干渉によって追放され、かわってアテナイに帰還したアルクメオン家のクレステネスが、競争者イサゴラスを抑えるために民主派となつて、支配的勢威を振っていた。ヒッピアスがベルジャに亡命していたことから、アテナイにはすでにベルジャへの敵意が根づいていた。

アリスタゴラスはこういう状況のアテナイにやってきた。彼はアテナイの民会で数千の市民を前に……

A：外国人でも民会に出席できたのですか。

Q：アテナイの直接民主制というのは、現代人には考えられないくらい徹底したもので、外国使節がくれば民会の席で直接その口上を聞き、ときには討論の相手までさせて、その上で民会が戦争、講和までを含む意思決定を行なうシステムだった。アリスタゴラスは民会で、まず、ミレトスははじめイオニア諸市は、元来はアテナイの植民市であり、同胞の隷従を見殺しにしないように、と懇願し、ベルジャ人の戦法とアテナイ人の実力を比較すれば、ベルジャ軍を屈服させるのは容易であること、ベルジャを敗北させた場合にアテナイの支配に帰する無限の土地、天然資源、産物、多様な民族のことなどを滔々と述べた。アテナイのしてくれる軍事援助にともなう財政負担のほか、アテナイのどんな要求にも応ずる用意があると請合つた。

彼の弁舌は冴え、民会は興奮し、冷静にと叫ぶ少数者の声はかき消された。ついにイオニア救援に20隻の軍船を派遣する決議がされた。強大になったといっても、アテナイはまだ後年の大海軍国にはなっていなかった。このようなわけでヘロドトスの表現を借りれば、1人をだますよりも3万人（アテナイ民会の定員）をだますほうが容易だった、という結果になった。

こうして前500年イオニアの大反乱のはじまった。アテナイは約束の船を送り、イオニア連合軍はエベソスに上陸してサルデイスに進撃し、これを炎上させたが、ベルジャ軍が反撃に転ずると退却し、エベソスで捕捉された。アテナイはこの段階で計画の無謀さに気づいて手を引いたが、ときすでに遅く、その後につづく22年間の苦難の道を自ら選択してしまっていた。

ダーダネルス、ボスボラス両海峡方面の諸市、小アジア西部のカリア、キュプロス島の大部分も反乱に加担し、小アジア西部の制海権は反乱側の手に帰した。しかし、キュプロス島をはじめ、陸戦では反乱側はほとんど敗北に終わり、大陸の反乱諸市はつぎつぎにベルジャ軍

に征服された。ただ1度カリアへ向かったベルジャの1軍団がせん滅されるということがあった。

キュメ、クラズメナイの重要2市が陥落したとき、アリスタゴラスは前途を断念し、ミレトス退去を考えた。逃避先としてサルディニア島とミュルキノスが考えられた。ヘカタイオスはミレトス西南60kmに浮ぶミレトスの植民市レロス島を提案したが、アリスタゴラスはミュルキノスを選んだ。しかしここに移ってまもなく、ここを根拠として作戦中に彼は戦死した。

イオニアの反乱が峠を越したころになって、ヒステイアイオスはやっとスサを離れることを許され、サルデイスに到着した。アルタブレネスから、「イオニアの反乱の原因についてどう思うか」と訊ねられて、「自分にはさっぱりわからない」と答えたが、アルタブレネスは「その筋書を書いたのはそなたではないか」と浴びせた。その夜彼は逃亡してキオスに渡った。いよいよ自分が反乱の総指揮を取ろうとしたが、いまや反乱の中心はどこにも存在せず、彼がその黒幕であることを知るものもなかった。アリスタゴラスの去った後のミレトスも、彼の復讐を拒否した。彼はようやくレスボス島で8隻の船を手に入れ、ビュザンティオンを基地として、海賊に近いことから始めて、自前の勢力の再建にかかった。

一時劣勢に陥っていた海軍を再建したベルジャは、やがて陸海の大軍をミレトスに集結した。イオニア海軍の陣容は相手に対し非常に劣勢というわけではなかったが、決戦の最中にサモスの船隊が戦線を離脱すると、それにつづくものが続出し、完敗した。この後ミレトスは陸海から嚴重な攻撃を受け、ついに陥落した。反乱開始以来7年目だった。ミレトス市民の男は大部分殺され、ミレトスは歴史の舞台から姿を消す。

ミレトスが陥落すると、他のすべての都市もつぎつぎにベルジャ軍に征服され、サモス以外は焼却された。ヒステイアイオスは、なおしばらく勢力を拡大しつづけたが、糧食確保のために大陸側に上陸したとき、大将ハルバゴスの率いる軍団に遭遇し、捕えられた。

ハルバゴスとアルタブレネスは相談した。彼を生きたままスサに送れば、ダレイオスは彼のすべての罪を許し、再び寵臣として重用するだろうと。2人はヒステイアイオスを処刑し、胴体を磔刑にし、首をスサに送った。ダレイオスは彼を生きたまま連れてこなかったことについて2人を叱責し、首を洗わせ、ベルジャに大功のあった者としての礼をつくして埋葬させたという。

A：これが第2の3パーソン・ゲームの結末ですか。（つづく）（筑波大学社会工学系 わたなべ・ひろし）